

# ダブルフェイク

正木 高志



カリフォルニアでは  
丘が燃え上っている

無視しろっていうの  
警告は聞いたはずよ

自分で毒を飲みながら  
神に救いを乞うなんて

洪水が起きたらオシマイ！  
天国なんてどこにもないわ

よい娘はみんな地獄行きさ  
all the good girls go to hell

\*

17歳の少女の詩。なんて凄まじい時代になったのだろう。アマゾンの森もオーストラリアの森も燃えている。氷河は溶けだし、温もった海には巨大なハリケーンが渦巻く。彼女は、去年11月にロサンゼルスで行われた環境デモに参加してグレタ・トゥーンベリと一緒に歩いた、ビリー・アイリッシュ。

グレタ現象とでもよぶべき社会現象がおきている。15歳のスウェーデンの少女が、毎週金曜日に学校を休んで、独りで国会前に座りこみ、気候行動を求めるデモを続けた。一匹の蝶の羽ばたきのような、その小さなアクションが、みるみる世界に伝わって、彼女は昨年9月の国連の気候サミットで演説、行動をもとめるデモには世界中で500万人が参加、12月にはTime誌の“Person of the Year”に選ばれ表紙を飾った。

2020年になってグレタ現象はますますヒートアップ。まるでカラカラに乾いた森林に野火が広がるように、マスコミのニュースを賑わし、SNSのタイムラインを埋めつくした。ところが、それから2週間もたたないうちに、(少なくとも日本では)グレタの名前が一斉に引いてしまったのだ。まるで熱波に襲われたタイムラインに冷水が浴びせられ、一気に寒冷化してしまったかのよう。

みんなが口を閉ざし、空気を読むようにな

ってしまったこの現象は、いったい何だろう？インターネットが網に捕らわれたかのように話題にできなくなった、この靄のようなモヤモヤの正体はいったい何だろう？そう考えていたとき、私の新刊『地球のマユの子供たち』の紹介のために、名前のない新聞がページを空けてくれた。そこで、本の紹介よりもグレタ現象のほうに興味を惹かれて、紙上を借りて考察をこころみることにした。

## ❖ ダブルフェイクの網

ブッシュ Jr.と熾烈な大統領選を戦ったアル・ゴアが書いた(とされるが、おそらく編集者やシャドーライターたちによって書かれた)『不都合な真実』という本は世界的なベストセラーになった。地球環境問題、とくに温暖化について、データを基にきちんと整理され、とてもよく書かれていたけれど、その時も読み終わってから私はモヤモヤとした違和感を覚えた。さまざまな環境問題が網羅されていたにもかかわらず、放射能や原発について一言も言及されていなかったから。

『不都合な真実』の温暖化に関する記述は正しい。CO2の排出を早急に削減しなければならないという主張も正しい。だけど本にはまったく書かれていないが、時を同じくして「CO2削減のためには原発を推進するしかない」という世論がたちまち湧き起こったのだ。その因果関係をよく観ると、地球温暖化という「不都合な真実」は、原発を推進したい企業にとって、じつに「都合のよい真実」だった。アル・ゴアのいう温暖化は世論を原発推進に導くためのフェイクストーリーだったのだ。スリーマイル島の事故以来、原発に懐疑的になっていた米国民の世論を変えて原発推進に大きく貢献した、まさに聖書を手にした詐欺師のような、この温暖化ストーリーが第一のフェイクである。

そして第二のフェイクは寒冷化ストーリーだ。こちらはシンプルで分かりやすい。いろんなバリエーションがあって、多くはNASAや有名大学の博士の肩書きで語られているが、それはお金さえ積めば何とでもなる。たとえば数万年単位のデータを基に語られる地球の寒冷化ストーリー。数百万年単位

のストーリーもある。数億年単位の気候変動のデータだって持ちこまれる。あるいは十年単位の局所的な寒冷化ストーリー……などなど。そして最後にこう付け加えられる。ほんとうは地球が寒冷化しているのに温暖化を騙るのは原発推進の陰謀論である、と。

データは正しいだろう。それぞれのレベルで地球が温暖化や寒冷化していることもわかる。しかしいまIPCC(国連気候変動に関する政府間パネル)で論じられている温暖化は、産業革命以後の、温室効果ガスの排出にともなう気温上昇の問題なのだ。この200年あまりの温室効果ガスの排出量と世界の気温上昇は明らかに相関している。そのデータに基づき、近い将来の地球環境危機が予測される。それを避けるためにはどうすればよいのかという、これは文明のあり方を問う議論である。

IPCCで議論されている気候変動ストーリーをカテゴリーAとし、数万年単位で論じられる気候変動ストーリーをカテゴリーBとすれば、AとBでは議論のテーマがまったく異なる。同じプラットフォームで論じるのはカテゴリーエラーだ。それなのになぜ、Aの議論にBのストーリーを持ちこむのか？そう突き詰めれば、それがAの議論を攪乱するためであるのは明らかだ。

では、誰がそれをしているのか？

もちろんそれは、Aの決定によって活動を規制されることになる企業群だ。企業活動と自由貿易の妨げになるあらゆる規制を緩和しようというのが新自由主義経済である。マンモス企業は優秀な知能を集めたシンクタンクを備えている。そこでは公共の利益ではなく、自社の業績と利益をあげるための、あらゆる戦略と戦術が研究されている。『不都合な真実』のストーリーも、寒冷化のストーリーも、そのようなシンクタンクで編み出されたフェイクだ。

シングルのフェイクストーリーは見破られやすい。だけど二重のフェイクが縦糸と横糸のように編み上げられると、強力なダブルフェイクの網になる。

ダブルフェイクの網に囚われると、議論が攪乱され、右にも左にも動けなくなる。プラットフォームそのものが網で塞がれて、議論が成り立たなくなってしまう。

民主主義の市場に網を打つのはマンモス企業が所有するマスコミだ。そしてSNSには大量のフェイク情報が投入される。人々は疑心暗鬼に捕われて口を閉ざす。

戦略的に流されるダブルフェイクによって、社会はいわば統合不全症候群に陥ってしまう。嘘だらけの世界で彼らは、子供の手をひねるように、フクシマを分断し、支配する。

♣️ **ダブルバインド**

ダブルバインドについてブリタニカ百科事典には次のように書かれている。「アメリカの文化人類学者グレゴリー・ベイトソンが1950年代に、統合失調症を説明するために提案した概念。二重拘束。たとえば母子関係のような抜き差しならない状況で、あることを《しなさい》と怒って命令する母親が、同時に《いちいち何をしたら怒られるか気にするんじゃない》と言ったとすると、子供は母親の命令に対してどのように対処したらよいかわからなくなる。このような事態がくり返されると、子供はことばの論理的な矛盾のために、行動不能に追い込まれ、結果として統合失調症的行動パターンを身につけるといふ。現代にこうした状況が一般化していることから、その後の精神医学や精神療法の理論に影響を与えた。」

ベイトソンの定義によればダブルバインドは次のようにして発生する。

- 1 家庭や学校や会社のような複数の人間関係で、親や教師や上司のような権威を持つ者から
- 2 否定的な一次メッセージが命じられ
- 3 同時に、表層の言葉と矛盾する副次的なメッセージが命じられ
- 4 被害者がその人間関係から逃れることができず
- 5 解決不能な状況がくり返し経験されると
- 6 被害者は統合できない心理と、分裂した世界観を持つようになる

親の子に対するダブルバインドは子供から自立心や主体性を奪う。上司から部下へのダブルバインドはモラハラやパワハラを生み、部下がウツに陥ることがある。

♣️ **文明のダブルバインド**

アポロ11号が月に着陸した1969年、人類は月から地球を考えるようになった。

星はちっぽけで、その美しく青い輝きはとても毀れやすそうに見えた。ローマクラブの科学者や経営者たちは、この星の上でこれまでのように経済が発展し、環境問題を引き起こし、膨大な軍力を持って、これからもずっとやっていけるのだろうか心配した。そこで彼らは「人類が将来直面する危機の要因と相互作用を把握できる全地球モデル」の研究をマサチューセッツ工科大学に依頼した。

レポートは1972年に『成長の限界』というタイトルで出版されて世界に衝撃を与えた。そこには「世界人口、工業化、汚染、食糧生産および資源の使用の成長率が不変のまま続かならば、来る100年以内に地球上の成長は限界に達するだろう。もっとも起こる見込みの強い結末は人口と工業力のかなり突然の、制御不可能な減少であろう」と結論

されていた。

危機感をつのらせた欧米諸国は1970年代に6つのメジャーな科学的未来予測を行った。最後に発表された“The Global 2000 Report to the President” (1980)はアメリカ合衆国政府が総力を結集して研究したものであり、データはさらに広範囲に、緻密になったけれど、結論はおなじだった。いや、むしろ悪くなった。「有限の地球で無限の成長はできない。経済成長は西暦2000年には行き詰まる」

それから地球温暖化の危機に対応するための議論がIPCCではじまった。しかし資本主義の中枢機関である世界銀行とIMFと米財務省はそれを無視して、新自由主義経済の道を選び、新世界秩序を目指すことに決定、それをワシントン・コンセンサスとよんだ。フェイクが流行するのは、それ以降の90年代に入ってからだ。

「限界」は厳然たる現実だ。誰も逃れることはできない。「成長」は資本主義経済が従わなくてはならない宿命だ。この両立できない、矛盾する二つの命令に二重拘束されて、今日の世界は統合不能に陥ってしまった。

座礁したタイタニック号のカジノではまだルーレットが回け続け、バンカーたちが血眼になっている。傾いて沈没してゆく船内にはデマが飛び交い、一般の乗客たちは分断されて反目し合い、1%が99%を支配する。どこかで船乗りの叫ぶ声がする。「船が沈むぞ！ はやく逃げろー！ 海に飛びこめー！」

♣️ **非二元……non-duality**

風のある日。海には無数の波が立ち騒いでいる。サーファーが喜びそうな日だ。

いまこの一つ一つの波頭を、私たちのような凡人と観よう。メタファーである。

その中の一人が、「私は誰か？」と自分を探しはじめた。これは難問だ。

彼は師を求め、これぞと思う師に教えを乞う。師は彼に言った。「両手を叩き合わせると、ホレ、このように音がする。自己を知りたければ、片手の音を聞きなさい」

さらなる難問を抱えた弟子は苦悶する。来る日も来る日も座禅を組み、熟考し、答えを老師に告げる。しかし師は肯かない。どう考えても、どう答えても、師は厳しく彼を追い返す。そうして3年、師に否定されまくった弟子は、矢尽き刀折れて、とうとう探究をあきらめてしまう。

意気消沈した波は、海に沈む…  
死ぬほどつらい波は、沈み続ける諦めて、自分を海に委ねてしまう  
波はゆっくりと、海に溶けてゆく  
自我が溶けて、薄れるにつれ  
海の音が、しだいに聞こえてくる  
無数の波の声はただ一つの海の声だ

二のない無双の、歓びのハーモニー  
そこにはすでに、聞く者さえない  
父母が生れる以前の、未顕現の海は  
仏性の海であり、光の海であった…

この、老師が弟子にするような二重拘束を、ベイトソンは「神秘主義のダブルバインド」とよび、「神秘主義者はダブルバインドの海に溺れず、泳ぎ渡る」という。

さてここで紙面が尽きた。この先を読みたい人には本を買っていただくしかない。笑  
紙面を空けてくださった名前のない新聞の浜田さんに感謝します。

最後におさらいをしておこう。

ダブルフェイクの網を仕掛けるのは、企業活動を規制されたくない、また原発も手放したくない、新自由主義経済だ。その二重拘束の海を泳ぎ渡るには二重解放が必要だ。地球温暖化を止め、同時に原発をなくす。それだけじゃなく、プラスチックゴミを出さず、森林を破壊せず、基地も戦争もない地球へ。

そこで問われているのはこういうことではないだろうか。

「僕らは地球を愛しているか、地球が僕らを愛しているほどに♪」

そうだよ、ボブ。

この「非二元……non-duality」が『地球のマユの子供たち』のテーマです。本のご注文は下記のメルアドへ名前と住所と電話番号をお知らせください。  
maisamasaki@gmail.com  
フェイスブックのメッセージも可  
『地球のマユの子供たち』南方新社。  
定価 1200円 (送料なし)

